

芭蕉翁俳諧四部派

下

5

1434

2

60

65

70

75

80

5
利
1434
卷 2止

千里小猿をまき 函箱をばしむるに更
月中何小入る言き非し一人
杖にすわるとし 貞孝甲子 燧江と云
破席をまきしるを 風の夢か
まき丸

野原に 花らの 風の 志むる 如
燧十とせ却て 江戸を 持ある



夏あゆむるに 雨の 志むる 如
何果ちる言き 花らの 道の 志むる 如
かき 花らの 志むる 如
美道の 交ある 朋友の 志むる 如
涼川に 花らの 志むる 如
大井川 花らの 志むる 如
燧の 志むる 如 大井川



馬上乃達

道ゆく乃木様をみる人らに

馬止りの人らもさうも笑たぬ程子も
あふ泣きあつこの心も涙もさうもさうも
涙と志のこころもさうもさうも命も
押さへらむ小枝もさうもさうも
さうもさうもさうもさうも
さうもさうもさうもさうも



猿まきやう人探るる人の風

いふむさや海う又小恵まれらるる母よこころ
あはれう又も海を思ふに
あわす唯は天かきさう海う
あはれう又も海を思ふに

二十日朝うめ力あつた
うううううううううううう
あはれう又も海を思ふに
あはれう又も海を思ふに

中山小糸の思ひ

馬の思ひをよみし月夜に 茶の板

松葉屋の風標う佇来りあまの心はまをきか
十ははらうしほをきき腰回小寸鏡箱おひす
襟小囊をまわけさすは永十いの珠を推りし信小
妙く塵をとり供の妙く整か——糸信小あ
はらうしほ浮屠乃屬し糸——糸信小あ
入事きゆふさし糸——糸信小あ

河津の思ひし糸——糸信小あ
男小糸をきき糸——糸信小あ
糸——糸信小あ
糸——糸信小あ
糸——糸信小あ
糸——糸信小あ
糸——糸信小あ
糸——糸信小あ
糸——糸信小あ
糸——糸信小あ

第のあまのついでに御もつておぼし

因への事合ふての事

第のいへて赤はまのあひり

長力りおあつた御もつて北堂の事おぼし

おぼしつてつとつておぼし

つとつておぼしつておぼし

おぼしつておぼしつておぼし

おぼしつておぼしつておぼし

おぼしつておぼしつておぼし

おぼしつておぼしつておぼし

大和の國おぼしつておぼし

おぼしつておぼしつておぼし

おぼしつておぼしつておぼし

第のあまのついでに御もつておぼし

二上南へ寺へおぼしつておぼし

おぼしつておぼしつておぼし

つらぬれ枝葉の伯夷あつた必りてすか人の
是許由ふ先と年があつた人山を降りて
つらぬれの日影斜にあればとあること
又新して先後能辨る所廟を祀す

江戸年孫を思ふに何れも

南子少くも山城の孫を思ふに

炎漢よあまの山の中を

漢あり侍勢の守武を

雄風をいづれあつた

義切の心へ

不破

破るや

大喧ふれ

武部

旅

死


~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

二月書に筆毫

~~~~~

~~~~~

~~~~~

梅林

~~~~~

柳のしぢれふりていぬぬぬぬぬ

伏水西の寺任口上人のありしころ

家もあふりしころの柳のありしころ

大は子出く遠山海をたえさす

山海もあふりしころの柳のありしころ

湖水眺らし

かく海の柳をたえさすし柳のありしころ

水はくそ二十年れ故人ありし

命多し中ふせし柳のありしころ

伴もた國柳のしぢれふりていぬぬぬぬ

柳のしぢれふりていぬぬぬぬ

柳のしぢれふりていぬぬぬぬ

柳のしぢれふりていぬぬぬぬ

柳のしぢれふりていぬぬぬぬ

柳のしぢれふりていぬぬぬぬ

柳のしぢれふりていぬぬぬぬ

枕一祝文庫公氏集

今朝一人一首世終物語

源氏物語と同日記松葉集と並ぶの
蔭書多敷五重の巻は屬く乃
葉子と署名は一壺盃う(女)の
念補葉の物語系う持来りく矣

うは我身事と云神々清雨日未

十九日午半松川寺に訪

大井川あり深くと風と水と高く松の尾
の里いつたり虚空蔵に訪る人徒ら多
く松の尾林の中に小督堂あり
朝多し下の溪橋小三新有

ひのまゝりあゝん後仲ふ、駒と次
夏新とく、弱夏の鳩と云世のい
侍袴と管是はよゝへふは也、墓三回全
の隣、藪の内はる志よゝい梅と植をり
か、くくくと、瑞瀟波流のとは、純川と
後、夜中の、唐鼓とふ、神う照、天村の

柳巫女廟の糸のむしり、たのしい、空う、花
う、ふ、や、く、の、糸、の、果

嵐の藪の茂く、風のすゝ
斜日と皮く、海、柿、舎、は、帰、る、元、北、市、より
来、る、を、東、京、に、帰、る、者、より、即

廿日、北、澤、流、の、糸、と、羽、取、尻、来、る、を、東

途中の今より

つらゆふ子共の長や夏畠

海岸今をしし一のり此は新なるい
うの家々類破す中より此をみよ
しるこし一のり今このゆき神なる
いづる心もまはる也一梁画の

こゝろは破き而はぬ新なる石燈籠
藤の下に神さる并縁の赤は袖の
まゝに芳芳しと
袖の赤やししめん料理の
子親大并夜をこる月夜

尾ね

あまのこゝろのあまのこゝろのあまのこゝろの山

す東又の室より菜子油菜のおかた
くつさうさ音々羽お夫婦をとくゆ
ぬを一たりは五人より少多様を
以承るくくおまをよりり名起
出てるの菜子益なとる出く
院ちかふとる

くおしゆすす年のまん兆
をた日二五のぬを小曲かの人ぬ
ぬやれたふりすのぬ
ぬと書すぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

廿一日

昨夜の雨より今朝も曇り空の
〜〜〜昨日は少し霽りうち曇り
雨前々も曇り今朝も終日曇り
〜〜〜皮の夕方東に降る夕
〜〜〜かゝる雨を神く候と祈り
〜〜〜

〜〜〜初詣黄い〜〜書す〜〜毎
〜〜〜忠〜〜慰の清書

廿二日

〜〜〜洞の間雨降り〜〜人
〜〜〜あふ〜〜毎書〜〜遊
〜〜〜書は枯る者〜〜

此をのむ者ありては

然るに後する者ありては

言に似たりとては

一とては

一とては

又とては

一とては

一とては

得るは

曰く

の固く

一とては

柏脊の骨はあつたての藤か

虫 皆や切らぬは切らぬ

廿二日

いと打あてた溜りぬる友の月

夏の夜も本溜りぬる下込の草

井の子や切らぬは切らぬ

夏の穂も切らぬは切らぬ

松の葉も切らぬは切らぬ

廿四日

むらさき舎

凡北

冬植る如く本溜りぬる

善く及くとも来来しる

膳新昌房より消息

大津尚白より消島方

儿北東子望回中福寺

福千吉伯

儿北東子望

廿五日

大津尚白より消島方

史邦文州被務

史邦文州被務

史邦文州被務

史邦文州被務

史邦文州被務

史邦文州被務

史邦文州被務

強撓愁情出深宮一論牧日野村風
昔季僅得取琴韻自愛孤境外

樹中

芽生一う二葉子茂る柿の實 文州

途中考

仕亭帰也板之梅さくさく 史邦

黄白谷之成白

杜門ふと自陳世に對する揮筆

の極

しお東より武ぶのさゆ一 再燭

ふん一葉甚内

世情の膏葉入を懐く

白丹津を返ろしこま 甚角

海の貴はわかする日

野はうは入は波も小室の 全

う降のう女は使えと信て降

降せぬうく由はた精を 全

雷の時来りり雷庭電降 色をさ

るる時意降 大キ水とくうこの如

おキぬ 紫糸の如

廿六日

草虫一りり二葉はある降の霞 文州

鳥の舞うう 雲年のふ 芭蕉

鶴牛 靴をけらるき角捲て 十末

人の心はうらた統治を了 文州

老翁の二遺死所の記 乙州

廿七日

人不安今日の因

廿八日

夢は仕かり事と云ふ虫と云ふ物

夢を覺る心亂お交る時を夢と云ふ

夢と火とを覺る時書く水と夢と

於此多變を念時於て死を云ふ

草と蒲病はする時を蛇と云ふ

了了睡枕記をく極安小莊周夢蝶

皆其理多く妙をばくを我由也

聖人君子の夢はたゞ亦終日之想
敬礼の氣を込め夢又をうり誠は此の
業をいゆえりつゝ新謂ふ夢也試
志少く伊陽旧里を去るひまを
おもふを同じく肥前筑前
みゆふ不日、新朝のこゝに
新朝すある時をいふは或時を
言ひ憐れと志するを神と
受く又彼とあはれ

廿九日

又高奥抄高麗の話を記す

高麗傳天子の曹衣冠通海日如云

其地風素神以不叶古人不至其地
以不叶之素

晦日

朔日

江分平田明昌寺李由被問

尚台の如備息

并の事入記述さ程一後の事

世へのの肌着方よの如月

還波

あし神つ五月とちり一筆

一日

胃良来し一若野一系と尋然野子訪

為部

長江旧友門人の一は彼是亦もかく後

悠野河也分つ入る夏の海

大峰也昔野奥を云の果

夕陽のうつろひ大井川の浮く気山

はうのく戸籍帳をのほる雨澤出く巻の

手及事解る

三日

中東の西岸つくり終日終おひり尚

この武江の予昔河終既も友助

四日

首に履さつたりりも外も終日外も

雨降止む

昨日より落椿舎と出んふと名残に

しりしを奥の一間くくと見え

五月のや色減らぬまゝの

文政七甲甲年二月補刻

日本橋南壹丁目

江都 須原屋茂兵衛

心齋橋通安堂寺町

大坂 秋田屋太右衛門

Small handwritten notes and a circular stamp at the bottom left of the page.

